
『鈍角少年』と少女達

官木住辛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『鈍角少年』と少女達

【Nコード】

N0521J

【作者名】

官木住辛

【あらすじ】

これは鈍角少年たる僕こと「ユキ」の日常の物語だ。魔法の要素は一切ナシ。科学の発展で人型兵器が出たりもしない。真正正銘の普通の日常のお話だ

。
 といいんだけどなあ……………

プロローグ

僕は人の心に大変鈍い。

国語は昔から物語文の問題だけマグレ以外の正解をしたことが無いし、でも人の心が絡まない論説文は大変よくできています、と今まで会ってきた大半の教師、講師に言われまくるあたり、国語力がないのではなく、やっぱり人の心とか心情とかを察することができないのだろう、Q.E.D。表情にでる感情なら、

ある程度はわかるんだが、それでも僕は人に想われていても告白されるまで気付けない。妹には、「お兄ちゃん人は人の心を読むことに關しては落第点ね」などと言われたり、知り合いには「君は人の心を鋭く察しろとは言わないからせめて直角ぐらいには察せる人になるよ」だのと喩え方が合ってるのかわからないこと言われたり。

つまり僕は、この上ない鈍角少年だったのだ。うわーお。我ながらびっくり。

ところで脳内口癖というものをお持ちだろうか。頭の中で言い放つだけの口癖の事だが……。

僕はいつの間にか持っていた。うわーお。ハイ、コレ！今でました。「うわーお」。コレは生活の中でいつからか驚愕するべきことが多くなってしまったがために脳内で言っていたらいつの間にか、脳内口癖になってしまった。うわーお。

何に驚いたって、最初は中学生時代の後半だったかな。部活の後輩に告白されたあたりだろうか。当然

鈍角少年たる僕は言われるまで気付かなかった。あまりにも予想外すぎて初うわーお。僕はオンナノコに

モテる要素がないどころか、マイナス要因ばかりがあるようにしか思えないから驚いた。とっても。何がマイナスかと訊かれれば、ア

ニオタ（ここはあえて「ヲ」は使わない）だし、頭もそんなによるしくない。先程から言い続けている通りの鈍角少年だし、運動すれば人並み、顔はいたって普通。あらゆるセンスは欠乏している（音楽や美術は3以上の評価が取れない）し。うわーお。我ながらプラス要因が無い。

やがて中学卒業、高校に進学して、「うわーお」はそれ以上に万能を誇る事になったのだ。

僕を取り巻く女性の視線が、僕に向かってきたのだから。うわーお。

日常Ⅱ 僕＋学校＋女性？人（？ 5）

携帯電話の目覚まし機能が朝起きるべき時間を告げる。結構な音量でアニソンを垂れ流す。まじコレ

神曲。現在時刻7：25

「あっ……」

女性の声が驚いた声を上げた。声のした方を見ると、10年ちょっとの付き合いの幼馴染みがいた。

「あのー？沙希？あなたは一体何をしておいでなのでしょう」僕が問いかけた相手は幼稚園、小中高かれこれ10年以上の付き合いになる幼馴染み、朝倉沙希さんである。肩ほどまで伸びた天然茶色の美髪を持つ、美人の幼馴染み。家もすぐ隣で、家族ぐるみで付き合いのあるお方である。……うわーお、言ってみると何かフラグが立ちそうな設定である。幼馴染み。これって一種の属性？すっげー。……ところで沙希が持っているのは鍋とおたま。もしかして2次元世界によくある（ただし最近は滅多に見ない）鍋を金属で叩いて、ガンガンガン！とかそういうやつをやるうとしてたのだろうか。

「ねえ沙希？寝てる人を騒音で起こすのは良くないよ？」一応注意はしておくのだ。

「違う違う、これで交互に頭を叩いて起こそうとしてたの」うわーお。どこまで回りくどくないんだこの幼馴染みは。我が幼馴染みながら、恐ろしい。

「ユキがあまりに無防備に寝てて、学校遅れそうだから」このユキってのは僕のことを指す。女の子みたいだが、ちゃんと名前をもじ

ったモノである。何が「ちゃんと」だか知らんが。

「うん。その一撃で、ウェイクアップを促すどころか、永遠の眠りに誘われそうだよ」

「おいユキ飯食え」母からのコールである。ダラダラ話しても始まらないから朝ごはんにしよう。

まあ、朝ごはんと言っても、普通の和食メニューだから、特にとつとと言う事はない……気がしたが前言撤回。今日の朝ごはんは白米と焼鮭と小松菜の和え物と緑茶に……

「ミルクと角砂糖が添えられていることに純粋な悪意を感じるんだけど？」見たことあるぞ。これは確か、
り デイ茶って言うのだ。しかも角砂糖4つて。うわーお。糖尿病必至の魔飲料を飲ませる気でしょうか。母さんと沙希が2人そろつてニヤニヤしてるのは気のせいかな。

「あ、手が滑った」沙希がとても滑つてるとは思えない綺麗な動作でミルクと砂糖を緑茶に投入。

「あ………母さん？麦茶は？」

「ごめん、切らしてるの」ニヤニヤ顔を崩さず言いやがった！

くそッ！この悪意の飲料を飲まなきゃいけないのか！しかし焼き魚に飲み物ナシはキツイ……。八方塞がりだ！いや、七方塞がりだが残された一方は悪魔の道だ。俺は決死の覚悟を決めてその魔飲料に口をつけ……

「驚いた……」

あんな魔飲料としか思えないものがうまいなんて……」

通学路での会話である。

「ほら、好き嫌いせずに飲んでみるものよ」沙希の言葉になにか反論したいが、おいしかっただけに返す言葉もない。

「ハロー、ユキ？」後ろから来た白い高級車からまたもや女性の声が出た。振り返ってみるとそこには車の窓から顔を出した美人ツインテール少女がいた。いや、少女と言っても同じ年だが。高校に進学してからできた友人の双葉波瑠さんだった。双葉さんはお金持ちのお嬢さん……なのだが
気取ったりひけらかしたりするわけではなく……つまりまあ、性格よろしく、美人で、入学式の次の日から男子から告白されまくっている、というスゴイ人である。お嬢さん。ツインテール。うわーお萌え要素。

僕らも乗せて車が走り出す。運転手の野木さんの超絶運転技巧の賜物である。デコボコ道でも車はあまり揺れない。僕らは通学路で会った時に限り、車に乗せてもらって登校しているわけである。

「少しは鋭角少年に近づけた？」むう。痛いトコロを突いてくる双葉さん。

「いや、ユキったら全然」何故か沙希が答える。……まあ、返答に困るところだったと思うけど

何だろう、この居心地の悪さは。僕が鈍角少年であることを非難しているみたいだ。

「いや、非難しているんじゃないかって早く人の気持ちに気付けるようになってほしいのよ……その
……人の好意とか……」珍しく双葉さんがどもりどもりに言う。

「？」疑問符が頭の上に実体化しそうだ。何なのだろう。

「いや、いいわ……。しばらく無駄そうだから」沙希に見放された感が。同時に双葉さんも同意するように頷いている。?? 『鈍角少年』たる僕には何のことかサッパリ。

学校に到着。

御園^{みその}高校。僕の通う高校の名だ。この学校に進んだ理由は、頭がイイというのもそうなんだが、イベントが充実しているトコロだ。この学校は文化祭、音楽祭、体育祭などの普通のモノから、サバゲ―祭なんぞというモノもある不思議な学校だ。うわーお。なんの目でサバゲーなんぞ学校でやるのだろう。5月も半ば。ゴールデンウィークも終わって平凡な、そして平穏な日々が続いている。青い空も白い雲も僕の周りの世界の平和を証明しているようだ。高校に入っていくらか友達もできた。小学校、中学校と引き続き『鈍角少年』であるから人の心は以前として表情に出ないと想像もできないのだが。

正門から校舎の玄関へ歩いていく。そこで僕に鋭い殺気が

「ソニックインパクト！」

結構なスピードの拳と共に飛んできた！うわーおッ！？しかし僕も上半身を動かしてかわす。

「どじゃーん！青色メッシュのキョウスケさんですよー！」

宣言通り襲撃犯は僕の男友達？の泉響助だった。ちゃんと黒髪の

一部が青くなっている。この程度なら気にしない校風なので、青くても大丈夫。ちなみにコイツもオタク（やっぱりあえて「ヲ」は使わないでおく）。

「あー時にユキ君。魔砲少女ライカが第2期だそうだよ」オタク仲間ならではの？報告だった。うわーお。魔砲少女なんだよ。魔法じゃないんだよ。杖を振らないで魔法を使う斬新なアニメで、魔法少女モノと言うより、バトルアニメに近かったアニメだ。その第2期。僕としては大好きだったんだが、世間（の狭い範囲）では評価が分かれたそう。反省して魔法少女にでもなったのか。

「続編はライカの一世代後の話で、『魔導砲士カノン』^{マジカルバスター}だそうだよ。うわーおスタッフ反省してねえ。

その後ダラダラ続いた話を割愛。

閑話休題。

教室に入る。30人強の人数のクラスである。クラスとクラスの人に特徴という特徴は無い。至って普通のクラスだ。皆、普通の人間である。1人ぐらい誰も知らないトコロで世界を救ってる可能性もなくなくななくななくな．．．．．わかりづらい！、可能性もなきにしもあらずだが、まあ、僕の目の届く範囲に非日常は見当たらない。ホームルームが始まり、授業が始まる。

「弥生時代だ。大体B・C3世紀頃からA・D3世紀頃だな。低地に村を作って定住したワケだが、このとき2000年くらい前に大陸から伝わった稲作農耕を行って米を作っていた。この米を保管しているのはどこでしょう、はい、ユキ！」歴史の授業で不意に指された。フツ、その程度の問題！

「地下倉庫だと思「ネズミに喰われてる生ゴミ」っていました」誤答を緊急回避。過去形で体制を立て直す。「空中「弥生のテクノロジー凄いな現代以上だバカ。考え方は惜しいけど」……」あれえ？

「えー、高床式倉庫に米を保管していたのだがこれは何のためかというと米をネズミに……」

僕の、あるいは人類の意思とは関係ナシに時間は流れていった。

昼休み。食堂の席がいつぱいになる前に行こうと思ってキョウスケと一緒に歩いていたら、窓の外に人影が見えた。ここは2階である。窓の外同じ高さに人影が見えるのは……いや、さっき見た人には見覚えがあつた。アレは僕のクラスの学級委員の「え！？何やってんの木原さんッ！？」思わず窓から乗り出して自転車置き場を爆走していた美人のポニーテール学級委員に声をかける。

「何って食堂に向かつてるのよ！早くしないと席無くなるでしょうが！」わかりやすい答えをどうも。

「こらーッそこにいるのは誰ぞ！」「やばい、赤坂だ！」「ピューと擬音が聞こえそうな速さで木原さんはさつて行った。体育教師の赤坂先生（女）が追いかけていく。木原さんは先生を撒けるでしょうか。」「すごいねえ……ユキの周りの人は……」「キョウスケがそんなことを呟いていた。

食堂で天ぷら蕎麦（激大盛り600円……安いッ）を食べていると、ゼーハーと肩で息をするように木原さんが歩いてきた。僕の方の席に座って木原さんが言う。

「アンタのせいで席はあつたけど食券無くなつたじゃない！赤坂は

撒いて私だつてのもバレなかつたけど！」じゃあ良かったじゃないか。どうしろと？

「責任取つてその蕎麦をよこしなさい！」……………。

「まあ、激大盛りなわけだしちよつとぐらいイヤ、いいつて言う前に奪うな！」しかも割り箸を僕のそのまま使っている。うわーお！間接キス！？間接キスなの！？近頃の女子はそういうの気にしない方向なの

！？ああッ海老天盗られた！3本の内の1本だからいいけど！ズルズルツツといい音させて麺を吸って満足したのか「ご馳走様」といって木原さんが去つていった。……………残り三分の1の蕎麦と間接キス箸を残して。よかつたのかなあ……………木原さん。とりあえず今からでも箸を改めようとしたら箸が仕組んだように全て無くなつていた。「……………」うわーお。誰が仕組むんだろう。横でキョウスケがクツクツと笑っている。少し腹が立つたから、熱いおしぼりを投げつけてやった。

蕎麦を食べてから1人食堂を出て、廊下を歩いていると音楽室からピアノの音色が聞こえてきた。音楽室に入るとそこでセミロング髪を後ろで結んだ女子生徒がピアノを弾いていた。彼女は理音さんという。苗字はまだ教えてもらつてない。本人曰く、「苗字は同じ人すごく多いけど名前は同じ人は少ないから」だとか。個性を大事にしてらっさるのか。理音さんがピアノを弾く手を止めずにこちらを向いた。彼女のピアノは何か人を和ませる力があると思う。ホッとするとどうか……………1曲終わって次の曲を弾き始める。以前彼女がピアノを弾いている最中に「理音さんが弾くと音が綺麗だよ」と言つた時、

赤くなつて、俯いて、弾いている曲のテンポが100くらい上げて

スゴイ早さで弾いていた。その後しばらく硬直していたので、暴走してフリーズさせないよう、ヘタに褒めないようにしている。昼休みの終わりまで、僕はそこで彼女の音楽を聴いていた。

放課後。当たり前だが部活組や帰宅組に行動がそれぞれ違う。僕は1人になった。僕は部活をやってないので、そのまま帰ってもいいのだが、僕は図書室に向かった。図書室の中にまた小さな部屋がある。ここは文芸部の部室である。部員ではないのだが、僕は度々ここに顔を出す。文芸部員は1人しかない。「やあ」僕が声をかけるとその人がパソコンを叩く小さな手を止めて顔を上げる。天然茶髪ショートヘアに眼鏡をかけた中学生にも見えるその人こそ文芸部長の永井由宇さんである。メガネと創作的な活動。うわーお。これも萌え要素？ 閑話休題。僕が図書室にあった文芸部室の扉を何の気なしに開けたら驚いた本探し中だった由宇が大量の本と共にゴロゴロ落ちてそれを発掘して、という出会いのエピソードがある。それ以来、僕は度々ここに顔を出しているのだ。彼女はパソコンで小説を書いている。それを僕が読んでいるのだが、彼女の書いた小説は瑞々しい感じがして、情景が目には浮かぶようだった。ただし、『鈍角少年』は人の心がセリフや顔に出ないとわからない。その事を前に由宇に話したら、うんうんと唸り続け、パソコンを叩いては消し、また唸っていた。その姿はまるで好き嫌いの多い子に野菜を工夫して食べさせる親のようだった。

「ユキは何で『鈍角少年』なんだろうね」
由宇が言った。笑っているその顔には何か別の感情があるように思えたが、やはりそれが何であるかはわからなかった。それに対して僕はなんて言っているのか、わからないから黙ってしまうしかなかった。

次第に空は夕日の赤から、夜の蒼へ変じていった。

帰り道。偶然時間があつたのか、キヨウスケと遭遇したのでいっしょに並んで歩いている。彼は朝の話に出た魔法少女について話していた。それを聞き流しつつ、別の事を僕は考えていた。この世界の普通さについて、だ。いや、この世界に飽きているわけじゃなくて、でも魔法やら何やらがあれば世界はどう変わったのだろうか。この世界の物理法則はよくできてる。おかげでスプーンはどれだけ凝視しても曲がらないし、いくら念じても1円玉さえ宙には浮かばない。テレビでやってたマジックを見るとスゴイと思うのだが、一冊のネタバレ本で幻滅させられる。結局のトコロ、宇宙人とか異世界人とかいなければ物理法則の無視を神様は許してくれないのだ。非日常の一端でもあれば少し変わるかもしれない、と愚かなことを考えてしまい、声に出してしまった。

「……（非日常との）出会いが欲しい……」そう言った瞬間にキヨウスケが、くわっ！！と目を見開き、グシャアアアアアッ！！と暴力的な効果音で殴った。

「もうちょつと自分の周りを省みてほしいなー」

そう言うとキヨウスケは去っていった。

僕は、鈍角少年でしかない。人の心がわからない。僕は人の心がわからずに生きていくしかないのだ。頭を暗いムードで埋め尽くして僕は今日を終わらせた。

日常Ⅱ 僕 + 学校 + 女性？人 (？) 5 (後書き)

次の次から急展開を予定。

ソレまではグダグダストーリー展開。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0521j/>

『鈍角少年』と少女達

2010年10月10日20時57分発行